



JAPANESE / JAPONAIS / JAPONÉS A1

Higher Level / Niveau Supérieur (Option Forte) / Nivel Superior

Thursday 13 May 1999 (afternoon)/Jeudi 13 mai 1999 (après-midi)/Jueves 13 de mayo de 1999 (tarde)

Paper / Épreuve / Prueba 1

4h

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

Do NOT open this examination paper until instructed to do so.

This paper consists of two sections, Section A and Section B.

Answer BOTH Section A AND Section B.

Section A: Write a commentary on ONE passage.

Section B: Answer ONE essay question. Refer mainly to works studied in Part 3 (Groups of Works); references to other works are permissible but must not form the main body of your answer.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

NE PAS OUVRIR cette épreuve avant d'y être autorisé.

Cette épreuve comporte deux sections, la Section A et la Section B.

Répondre ET à la Section A ET à la Section B.

Section A: Écrire un commentaire sur UN passage.

Section B: Traiter UN sujet de composition. Se référer principalement aux œuvres étudiées dans la troisième partie (Groupes d'œuvres); les références à d'autres œuvres sont permises mais ne doivent pas constituer l'essentiel de la réponse.

INSTRUCCIONES PARA LOS CANDIDATOS

NO ABRA esta prueba hasta que se lo autoricen.

En esta prueba hay dos secciones: la Sección A y la Sección B.

Conteste las dos secciones, A y B.

Sección A: Escriba un comentario sobre UNO de los fragmentos.

Sección B: Elija UN tema de redacción. Su respuesta debe centrarse principalmente en las obras estudiadas para la Parte 3 (Grupos de obras); se permiten referencias a otras obras siempre que no formen la parte principal de la respuesta.

第一部

次の 1 (a) の文章と 1 (b) の詩のうち、どちらか一つを選んで解説しなさい。
(コメントリーを書きなさい。)

1 (a)

紀州に生れて、紀州に育った。しかも、紀州の一等端っこ、川ひとつ渡ると他県に出る新宮という町で、である。風土は、そこからどんなに遠く離れたとしても、この身を縛る。山々が、重なる。それも、中世の頃から延々とつづいたあの熊野詣の山である。とび抜けて高い山はない。だが、山だらけである。不意に、海がある。やはり、これもあの、袖陀落渡海、海である。漁港らしい漁港は、一帯にない。せいぜい勝浦の、小さな港だけである。 5

一人の小説家に、この風土とは、何なのだろうか、と思う。すぐ喧嘩腰に物を言う。人が、右と言え、左」と条件反射の如く反対意見が口をついて出る。キメ言葉を吐きたくて、うずうずする。十九歳の頃から、小説を書きはじめ、同人誌「文芸首都」に原稿を持っていった頃、さながらぼくは、この風土でつくりあげられた申し子のようなものであった。喧嘩につく喧嘩、毒舌につく毒舌だった。なまいきだった。あう人ごとに、そう言われた。心外だった。 10

いまから思えば、それは、紀州弁のせいなのだ。そう、なすりつける。紀州弁、いや、新宮弁には、敬語、丁寧語がない。

「この小説を、あなたは、いかが思われましたか？」 15

そう合評会で、目上の人に訊くとする。それを紀州弁にすると、

「この小説を、あんた、どう思たん？」

となる。これは女言葉である。それを男のぼくが、使って、それで敬語、丁寧語の代用にする。男言葉では、

「この小説を、あんた、どう思たん？」 20

となる。しかも、紀州弁のあのイントネーションで、である。ことさらてらわずとも、紀州弁だけで、充分、なまいきである。それなのに、さらに、地方出身者特有の、言葉が相手にうまく伝わらんのではないかという錯覚が起こり、言葉に言葉を接ぐ。なまいきに、なまいきを重ねる次第に、相なる。

紀州弁、新宮弁の特徴に、いまひとつ、「いる」という助詞がないことをあげる。 25

「なんな、そこに、あつたんか」それを、標準語にすると、

「なんだ、そこに、いたのか」となる。よく、東京の人たちに、人間を、物が在るように言うと、わらわれた。

さて、紀州というその風土に生れた小説家としてのぼくは、敬語、丁寧語のない言葉を血肉に受け、人がいるのではなく、在る、在ってしまう世界を畫こうとしているのだ、と言えば、自己解説しすぎるだろうか？ 30

一人の青年が、土方として、ここに在る。決して、それは、「いる」のではない。ま

ず、肉体として、在る。汗を流す。スポンの裏をひっくり返すと、体から流れ出た汗が、乾いてしまい、白い塩の結晶になってくっついている。また、働く。

上京して、長いこと、フリーテン生活をして、物を置きながら、職を転々としてきた。35
職のことごとくが、肉体労働だった。そのどれにも、肉体労働ほど、人間の頭を試すものはないと思ひしらされた。頭、それを知識と知性、心理と意識と言おうか？ 物といつも相対するわけである。土を一日ほじくり返す土方が、もし、いつも心理や意識の袋小路にはいり込んでしまうしかない人間だとしたら、何日それに耐えられるだろうか、と思うのである。そして、言葉を書かないアランやホッファとも言うべき人たちに、ぼくは、随分出会った。彼らは、人間は、「いる」のではなく、「在る」のだということを知っている。40

「いる」より、「在る」が、非文学的なものである。それがよい。だから「在る」ことのころよさは、言い換えてみれば、非文学的なもののころよさかもしれない。たとえば夜勤明けの朝、採光用の天窓からの明りで、色が黄金にみえるボルト、その物の輝きを、どう伝えたらよいか？ 物質的恍惚としか言えぬ怪験なのである。ボルトと、ぼく自身、ここに在る。飛行機に貨物を積み終え、ドアをロックし、さあ、走れ、翔べと馬にでも言うように、ジュラルミンのドアを、たんとたたいた時の、ジュラルミンの手ざわりである。飛行機が空を翔ける馬のようだと、レトリックを言うのではない。物とぼく自身の、交感のようなものである。「いる」ことではなく、「在る」ことが、ころよい。標準語を使う標準人のように「いる」ことを言いはじめると、この世界に、生きることに、随分風吹かすことになる。50

一年に一回ほど、矢も盾もたまず、紀州新宮へ帰る。東京へもどって来て、三カ月もすれば、正月のサーカス、二月の御灯祭り、紀州恋しさがつのる。恋しさが、恋しさの胸苦しさが、そこを舞台に小説を書かせる。これは、山紫水明でもなくなった故郷へ、ゴマのすりすぎか――。55

(中上健次『紀州弁』)

(注)

中上健次（一九四六―九二） 小説家。新宮高卒業後、上京してジャズや映画演劇に熱中する。羽田空港などで肉体労働に従事しながら、小説『十九歳の地図』を書く。代表作に『岬』『枯木灘』などがある。

補陀落渡海 「補陀落」は、西方浄土で観音が住むと言われている所。「渡海」は船で海を渡ること。中世からの信仰で、西方に向かって入水往生をすることを指す。

I (b)

I

三月 桃の花はひらき
五月 藤の花々はいっせいに乱れ
九月 葡萄の棚に葡萄は重く
十一月 青い蜜柑は熟れはじめる

地の下には少しまぬけな配達夫がいて 5
帽子をあみだにベタルをふんでいるのだろう
かれらは伝える 根から根へ
逝きやすい季節のころを

世界中の桃の木に 世界中のレモンの木に 10
すべての植物たちのもとに
どっさりの手紙 どっさりの指令
かれらもまごつく とりわけ春と秋には

えんどうの花の咲くときや
どんぐりの実の落ちるときが
北と南で少しづつずれたりするのも
きっとそのせいにちがいない 15

秋のしだいに深まってゆく朝
いちぢくをもうでいてと
古参の配達夫に叱られている
へまなアルバイト達の気配があった

II

三月 雛のあられを切り 20
五月 メーデーのうた巷にながれ
九月 稲と台風とをやぶにらみ
十一月 あまたの若者があまたの娘と盃を交す

地の上にも国籍不明の郵便局があつて 25
見えない配達夫がとても律儀に走っている
かれらは伝える ひとびとへ
逝きやすい時代のころを

世界中の窓々に 世界中の扉々に 30
すべての民族の朝と夜とに
どっさりの暗示 どっさりの警告
かれらもまごつく 大戦の後や崩壊の地では

ルネッサンスの花咲くときや
革命の実のみのるときが
北と南で少しづつずれたりするのも
きっとそのせいにちがいない 35

未知の年があける朝
じつとまぶたをあわせると
虚無を肥料に咲き出ようとする
人間たちの花々もあった

(一九五八 茨木のり子『見えない配達夫』)

第二部

授業で学習した部門(Part 3)から、(a)(b)の問題のうち一つを選んで、エッセイを書きなさい。エッセイを書くにあたっては、必ずPart 3で学習した文学作品三つのうち二つに言及すること。なお、この二作品のほか、他の作品について述べてもよい。

2. 美の探求

- (a) 「もののあはれ」は、日本の伝統的な感覚の表現であって、その精神は現代の文学に至るまで受け継がれていると言う人がいますが、あなたはどのように考えますか。（「もののあはれ」とは、しみじみとした情趣や哀感の意。）

あるいは

- (b) あなたの読んだ作品には、美と醜、善と悪というように対立するものがありますか。あるとすれば、それはどのような意味をもって表現され、作品の中でどのような効果をあげていますか。あなたの考えるところを述べなさい。

3. 社会と個人

- (a) あなたの読んだ作品において、「人間としての真の自由とは何か」という問題は、どのように描かれていますか。あなたの考えるところを述べなさい。

あるいは

- (b) あなたの読んだ作品において、社会と個人、組織と個人などの関係はどのように描かれていますか。また、それらの関係を通して、作者は何を伝えようとしていますか。あなたの考えを述べなさい。

4. 自然と人生

- (a) この世を「無常」と観る考え方は、万物は変化し、永久不変のものは一つもないという仏教の考え方をもとにしています。この考え方は、あなたの読んだ作品の中でどのように表現され、どのような効果を与えていますか。

あるいは

- (b) あなたの読んだ作品において、風景描写はどんな意味をもつものとして用いられていますか。いくつかの例を比較し、あなたの考えるところを述べなさい。

5. 家族

- (a) 家族の一員であることと個人として自由であることとの間には、どのような矛盾がありますか。例をあげて、あなたの考えるところを述べなさい。

あるいは

- (b) 家庭や家族のありかたは、どのようなかたちでその時代の影響を受けているでしょうか。あなたの読んだ作品から例をあげて、考えるところを述べなさい。また、影響を受けていないとすれば、その理由についても考えなさい。

6. 愛と友情

- (a) 恋愛や友情を描いている作品において、時間や空間はどのように扱われ、どのような効果をあげていますか。あなたの考えるところを述べなさい。

あるいは

- (b) 恋愛や友情は永遠に変わらない価値を持つものであって、時代や社会の影響を受けないという考え方があります。この考え方についてあなたの意見を述べなさい。